名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇　第59巻　第2号　pp. 17–25

〔論文〕

保育者の音楽に対する苦手意識を払拭する試み

――ワークショップ参加は意識をどのように変えるのか――

横　井　志　保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要　　旨

1989年に幼稚園教育要領が6領域から5領域になり，「表現」が生まれたが，多くの保育者らは「音楽」という形式や枠組みに囚われて音楽に対して苦手意識を持ったままである。そこで，本研究は音楽に苦手意識を持つ保育者らにワークショップに参加してもらい，その意識の変化について検討した。その結果，保育者自らが音にかかわる活動を重ねることで，音に対する新たな聴き方や捉え方をすることができるようになり，保育者の自信となり，それが子どもと共に活動を展開する助けとなることが示唆された。また，保育者自身が音や，初めて演奏する楽器を楽しむことができたことは，音楽に対する苦手意識を払拭することに繋がることが明らかとなった。

キーワード：音楽的な表現，ワークショップ，苦手意識，保育者，音をつくる

Can workshops that are conscious of musical expression activities in childhood education change the early childhood educators' awareness of weakness?

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

発行日　2023年1月31日

1. 問題と目的

幼稚園教育要領解説によると幼稚園の役割は家庭における教育を基盤として「家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ，教師に支えられながら，幼児期なりの世界の豊かさに出会う場である。」[1] と，ある。また，領域「表現」のねらいには「(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」[2] とある。そこで，幼稚園等では日常的に歌ったり，楽器を鳴らすといった音楽的な表現活動がなされている。ただ，これら音楽的な表現は，幼児の遊びの中から自然発生的に起こることは難しく，また継続しにくいため一定の保育者の指導や援助を必要とする。よって，子どもを支える保育者の影響は大きい[3]。

小学校以上の教師には学習指導要領と共に教えるべき内容が書かれている教科書があり，初任者や苦手な科目のある教員であっても教科書を使い指導書に従って授業を進めることができる。しかし，保育者には幼稚園教育要領等，指標となるものはあるが，具体的な保育の内容は全て保育者任せである。そのため，学生時代に音楽の授業，主にピアノで苦労した保育者は，いつまでも音楽に対して苦手意識があり，普段の子どもの遊び同様に捉えることが出来ずにいる現状が，筆者が189名の保育者を対象に実施した‘領域「表現（音楽にかかわる表現）」に関する調査’から示唆された[4]。

これまでに，児嶋ら[5] による保育者の実践をサポートする研修の取り組みや，中島[6] による造形指導のワークショップの取り組みはあるが，音楽に対する苦手意識を払拭することに焦点を当てた保育者を対象とした実践的な研究はされていない。

そこで，本研究は保育者にワークショップに参加してもらい，音や音楽を楽しむ体験を積むことによって保育者の音楽的な表現活動に対する意識の変化を検討し苦手意識を払拭することができるのかを探ることを目的とする。

2. 方法

保育者を対象とした，音とリズムをテーマにしたワークショップを本学のプレイルームおよび音楽室で開催し，その前後に，音や音楽，ワークショップに対するアンケートを実施した。

ワークショップの参加者は，概要を記した書面を大学近隣の幼稚園，保育園および卒業生に配布して募った。

応募参加者は7名であったが，内1名は小学校の特別支援学級担当の教師であったので，本研究結果からは除外し，研究対象は保育者6名とした。

《ワークショップの概要》

ワークショップは4回連続で，以下の日程と内容で実施予定であったが，新型コロナウイルスの影響で非常事態宣言発令により，第2回と第3回は中止となった。講師は筆者が行い，第4回のみウクレレ専門講師に依頼して実施した。

表1　ワークショップの日程とテーマ

日　程	テーマ
4月18日（日） 13：00～14：30	**音をつくる** 色々なモノを使って響き合うセッションをする
5月23日（日） 13：00～14：30	**たたいて音楽** 音具や打楽器を使用して音楽する
6月20日（日） 13：00～14：30	**身体で音楽** 楽器を使わないで音楽する
7月18日（日） 13：00～15：00	**弾いて音楽** ウクレレを弾いて音楽する

ワークショップの詳しい内容は以下の通りである。

【第1回　4月18日】

1. 音を聴く

(1) 参加者が各自，家から良い音の鳴るモノを持ち寄り，音を鳴らして聴く。

(2) ステンレスのフォークに凧糸を縛り付け，端を綿に縛り付け，その綿を耳に入れてフォークの音を聴く。

(3) たらいに水を張り，そこにステンレス製のボウルを浮かべてマレットでたたいて音を聴く。(図1)

図1　ステンレスボウル

2. 音の出るモノをつくる

(1) プラスチック製の植木鉢2つとクリアファイルを結束バンドで固定したトーキングドラムを作る。

(2) ポリバケツと角材, ベースギターの弦を使用した1本弦のベースを作る。(図2)

図2　1本弦のベース

【第4回　7月18日】

1. コードを覚える

(1) ウクレレの持ち方とフォーム，C F G_7のコードで基本的なストロークの練習をする。

2. 曲を弾く

(1) 聖者の行進を弾く。(使用コードC F G_7)

(2) カイマナヒラの部分奏をする。(使用コードC D_7 F G_7)

《アンケートの概要》

アンケート（1）（2）はいずれも自由記述で回答してもらった。

（1）ワークショップ開始前

①フェイスシート②これまでに行った印象に残る表現活動③表現活動がうまくいったと感じた時④表現活動がうまくいかなかったと感じた時⑤表現活動で難しいと感じること⑥表現活動で不安に思うこと⑦表現活動で自身にあると良いと思う力⑧表現活動時にあると良いと思うもの　等の13項目。

（2）第1回ワークショップ終了3週間後

①ワークショップに参加した感想②ワークショップに参加する前と後で，変化した意識や行動について。

（3）第4回ワークショップ終了直後

実施した第1回と第4回の内容それぞれについて以下の項目について①～⑤は5件法で，⑥～⑧は自由記述で尋ねた。

①活動の面白さ②保育に役立つか③自身で発展させられるか④表現らしい活動であったか⑤内容は期待通りであったか⑥感想⑦今後の保育への影響について⑧参加前後の意識の変化について

3. 倫理的配慮

研究対象者の保育者には，研究の趣旨と方法，個人情報とプライバシーの保護，研究協力への自由意思と協力の撤回の自由について口頭と文章で説明し，本研究への同意を書面にて得た。また，本研究は，名古屋学院大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得ている。

4. 結果と考察

（1）参加者の保育経験年数

参加者の保育経験年数は2年目2人, 6年目2人, 12年目1人, 23年目1人であった。（表2）

表2　参加者の保育経験年数

保育経験年数	人数（人）
2年目	2
6年目	2
12年目	1
23年目	1

（2）音楽的な表現活動が上手くいったという経験について

音楽的な表現活動が上手くいったと感じた時はどんな時であったかを事前アンケートで尋ねたところ，6名全員が上手くいったと感じた時があったと回答していた。

では，保育者がどんな時に上手くいったと感じることができたのか。記述の内容を表3にまとめた。また，内容を分類し破線と番号を付した。

表3　上手くいったと感じられた経験についての記述

・自由遊びの時間①に口ずさんで楽しんでいた時 ・演奏した後「楽しかった」①と言っていた時 ・活動で取り組んだ歌を日常の中で子どもが口ずさむ姿①や，子どもたちからやりたいと言う姿②が見られた時	・楽しく楽器を鳴らしている時③ ・息の合った合奏④ ・行事で成果を感じられた時⑤ ・歌ったり，楽器を演奏するだけでなく，音に合わせて身体を動かした時は子どもたちの反応も良かった③

記述の内容から保育者は，活動後に子どもたちが「楽しかった」と言ったり，その後の遊びの中で保育者と共に行った内容を再現して遊んでいる姿を見た時に上手くいったと感じることがわかった（破線①）。また，活動時の子どもの楽しそうにする様子や，合奏の息が合っていたこと等から上手くいったと感じることができたようだ（破線③④）。さらには，子どもたちの意欲的な姿や行事での発表の出来栄えの良さからも上手くいったと感じたことがわかった（破線②⑤）。

保育者たちが活動が上手くいったと感じる捉え方は5つに分類され，それぞれではあるが，破線④⑤のように演奏自体が上手くいっていることより，破線①②③のような子どもの活動に対する意欲や楽しそうに活動する姿，継続して遊び続ける姿から上手くいったと感じていることがわかった。

子どもたちが保育者と共に活動した後も継続的に遊ぶ姿等から，その活動は上手くいったと感じているのは，幼稚園教育要領，表現のねらい（2）に「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」とあることから，‘ねらいを達成することができた’＝‘うまくいった’と考えていると言えよう。

(3) 音楽的な表現活動が上手くいかなかったと感じた時について

次に，音楽的な表現活動が上手くいかなかったと感じた時がどんな時であったかを尋ねた結果を表4にまとめた。表3同様に記述内容を分類し破線と番号を付した。

表4　上手くいかなかったと感じた時についての記述

・リズムを子どもたちに伝えることが的確にできなかった時① ・リズムなど教えても？？がいっぱいで①子どもたちがおもしろくないと言った時② ・七夕会の発表会で，子どもたちの楽しさより出来栄えを重視してしまった③為，楽しんではいるもののあきてしまう子もいた④	・「まだやるの？」と声があった時④ ・子どもたちから「先生もういい？（おしまいにしてもいい？）」という言葉があった時④ ・カスタネット練習の際，男の子が自主的に参加しなかった②為，自ら楽しんで参加できるようにしたかった

保育者たちが，活動が上手くいかなかったと感じたのは破線①の様な指導法に課題を感じた時の他に，子どもの興味が継続しなかった時（破線④）や，興味を示さなかった時（破線②）に上手くいかなかったと感じていることがわかった。また，子どもの楽しさよりも出来栄えに重点を置いた結果上手くいかなかった（破線③）と記述していることからも，子どもの興味を的確に捉えて活動内容に反映させられなかった時に上手くいかなかったと感じることがわかった。

(4) 子どもたちと行う表現活動で難しいと思うことや不安に感じること

保育者たちが抱える音楽的な表現活動の時に感じている難しさや不安についての記述を以下の表5にまとめた。記述の内容は,「難しいと思うこと」,「不安に思うこと」共に,‘指導法について’と‘活動内容について’に分類された。

表5　表現活動の時に感じている難しさや不安についての記述

	難しいと思うこと	不安に思うこと
指導法について	・ピアノが苦手なので，弾きながら指導すること ・みんなで演奏する際，まわりの音を聞きながら合わせること ・先生の真似がうまくできなかった子にリズムを教えること ・子どもの発想をうまく引き出せない	・リズムが苦手なので，全体を聞きながらリズムを維持すること ・出来栄えを意識し過ぎてしまい，子どもたちがのびのびと表現できる指導ができるか不安
活動の内容について	・保育者も子どもも楽しむこと ・表現する楽しさを子どもたちが感じられなかった時	・楽しみながらした表現活動が行事などの結果につながるか ・子どもが楽しいと思えなかった時があったらと不安に思う ・表現活動のレパートリーが少ないため，何をどうしていいかわからない時

保育者がピアノやリズムを取ることが苦手であるといった，保育者自身が持つ苦手意識によって指導が上手くいかないことや，子どもが楽しんで参加できるような活動であるのかといった難しさや不安を抱えていること,また,表現活動の方法自体がわからないと不安に感じていることが記述からわかった。

(5) 音楽的な表現活動を行うために必要な保育者の力について

子どもと行う表現活動で自身にあると良いと思う力を尋ねたところ，表6の様な回答が得られた。

表6　表現活動で保育者自身にあると良いと思う力についての記述

・苦手意識を持つことがなく行える方法①を学び取り入れていきたい ・想像力豊か②で自由な表現③ ・子どもと一緒に楽しむ力④	・表現を共感し認めてあげる力④と表現を引き出す力① ・様々な発想力② ・表現力③・想像力②・共感覚④

保育者たちの記述からは，①指導力，②想像力，③表現力，④共感力の4つの力があると良いと考えていることがわかった。これらは活動を考案するのに必要とされる力であり，保育者が子どもと共に音楽を楽しみながら指導したいと考えていることがわかる。

(6) 音楽的な表現活動の時にあると良いと思うモノについて

表現活動の時にあると良いと思うモノについて尋ねたところ，半数の保育者より以下の様な回答があった。(表7)

表7　表現活動の時にあると良いと思うモノについての記述

・表現が楽しくなるような環境が整っている部屋 ・日常の中で音を出して遊べる物	・音の出るモノ ・多くの楽器

回答からは音楽的な表現活動をするために十分な場所と楽器，また，日常生活の中で音を鳴らして遊べるモノが十分揃っていないと感じていることがわかった。

(7) ワークショップは参加者にどのような意識や行動の変化をもたらしたか

ワークショップ第1回終了およそ3週間後と最終回終了時に意識や行動の変化を尋ね，記述の内容を以下の表8にまとめた。

表8　ワークショップ参加後の意識や行動の変化についての記述

第1回3週間後	最終回終了時
・子どもたちも興味津津でした。朝の時間に廃材遊びをしているので，「こんな楽器なら廃材でできそう！」とか，楽器遊びの導入にもなるかなと職員同士で話すきっかけとなりました①。 ・欲しい音のために「～の楽器を購入しなければ」ではなく自宅にあるものを工夫し代用できないかなどの考えに至るようになりました。 ・日常生活で目にするモノを叩いてみたり，振ってみたりするなど身の回りのモノに対する見方が変わりました②。 ・もちろん，自分が音に対して感じる事ができたため，保育の中でも，普段の音を子ども達に聞いてもらいたいという意識だったり，前回作った楽器の音を聞かせる事で，子ども達が私を見る目が変わったような……気がします③。 ・日常生活でさまざまな音を耳にしていますが，これらの音を何かに表現できたり，音楽に合わせたりと様々な楽しみ方があるんだと思いました。子どもたちにも「この音いい音だね！」とみんなで共有し合ったり，普段の生活の中で身近な音にも着目してみるようにしています。YouTubeで様々な物を音で表現している動画があり，音に対する興味が広がりました。	・普段の保育の中で，“自分も楽しみたい”という気持ちを持ちました④。 ・決められた活動で行う表現も良いですが，もう少し簡単に作れたり，楽器じゃない物から音を出してみたりと，楽しみながら取り組むことが表現活動にとってとても大切である④と学ぶことができました。 ・音楽って，やっぱり，音を楽しむものなんだ……。楽しさを，子どもたちに感じてもらいたいと思った④。 ・音楽的なことは苦手という意識が高いが，参加して苦手なりにアプローチを変えていって，楽しめる部分を見つけていけたら良いなと思えるようになった④。 ・子どもにとって身近なものには，実体験として触れると良いと思えました。 ・身近な素材（バケツとか……）を音楽に取り入れることの楽しさに気付けました④。今の子はなかなか「聞く」「聴く」ということが苦手。でも，楽しそう，興味あることには耳を傾けてくれそうです。音を感じる，楽しさを感じる……そんな感性をもっともっと育てていきたい……と思いました。 ・久しぶりに“初めて”のことを経験し“できるようになる楽しさ”を味わうことができました。又，褒めてもらいながら教えていただくことで，子どもの立場のような経験ができました。今後の保育にも意識し役立てていこうと思います。

第1回終了後に変化したこととしては，ワークショップの内容を受けて，職員同士で話すきっかけとなったり（破線①），楽器以外のモノによる音に着目するようになったり（破線②）している。その他，保育者の変化ではないが，自作の楽器の音を子どもたちに聴かせたことで，子どもたちの保育者を見る目が変わったという回答があった（破線③）。

その後，最終回終了時には破線④で示したように，「楽しさ」や「楽しみ」といった第1回終了時には無かったワードが見られ，音や音楽を通した楽しさに気付いたといった，意識の変化をみることができた。保育者自身がワークショップで新たな音や音楽と出会い，楽しむ体験をすることが意識を変化させた要因となろう。

総括と課題

本研究では，ピアノや音楽的な表現活動に対する苦手意識のある保育者が，ワークショップに参加することで子どもと共に行う表現活動への苦手意識を払拭することができるのか検討してきた。

どの保育者にも子どもと共に行う音楽的な表現活動が上手くいかなかったと感じられた経験だけでなく，上手くいったと感じられた経験もしていた。しかし，ピアノが苦手であることや子どもにリズムを上手く指導することができないといった指導上の悩みも抱えている。こういった指導上の課題は，適切な指導法を知ることや活動内容のヒントになるような方法を知ることで解消されると言えよう。ワークショップ参加後のアンケートからも，音に対する意識や取り組みの変化が見られているし，自作の楽器の音を聞かせることで子どもからこれまでとは違った保育者として見られるということは，子どもから一目置かれた存在として認められたことであり，保育者の自信につながることとなる。本研究のようなワークショップを重ねることは，保育者の知識を増やすだけでなく，子どもと共に行う音楽的な表現活動の幅を広げる助けとなることが示唆された。また，保育者自身が音に耳を傾け，音を楽しむ体験を積むことが保育者の音楽的な表現活動に対する苦手意識を払拭することにつながることが明らかとなった。

子どもにとって音楽的な表現活動は特別なものではなく，他の遊びと同じである。本ワークショップに参加した保育者たちが音楽的な表現活動を特別視せず，いつでもどこでもできる活動として日常の保育に取り入れてくれることを期待したい。今回は「音をつくる」および「弾いて音楽」の2種類のワークショップであったが，課題として，他の表現方法でのワークショップ参加が保育者に与える影響について検討することが残った。

謝辞

本研究にあたりワークショップに参加してくださった保育者の皆さんに感謝致します。本研究は名古屋学院大学2020年度研究助成を受けたものです。

引用・参考文献

1）文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館（2018）
2）文部科学省『幼稚園教育要領』文部科学省（2018）
3）梅澤由紀子，横井志保「叩く表現活動モデルのDVD録画を，どう読み取るか―保育者への質問紙調査から―」愛知教育大学幼児教育研究　第16巻　pp. 1–8（2012）
4）横井志保「領域「表現」に関する調査研究：音楽的表現における保育者の意識と実態について」名古屋柳城短期大学　第33巻　pp. 125–130（2011）
5）児嶋輝美，岩崎順江，川端惠子，疋田弘子，古本奈奈代「保育実践の改善をサポートする現職研修の取り組み―音楽的な活動を通して―」徳島文理大学研究紀要　第98号　pp. 35–42（2019）
6）中島法晃「造形指導に不安を抱える保育者にとって有効な表現素材と活用のあり方～保育者研修会のワークショップ事例を通して～」岐阜女子大学紀要　第49号　pp. 59–65（2019）